

IV 「人文学フィールドワーカー養成プログラム」調査報告

# 「お見舞い」と葬送儀礼

——岐阜県七宗町神淵・愛知県北設楽郡東栄町における調査を中心に

下本 英津子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士後期課程2年

## はじめに

本プロジェクトは、「お見舞い」と地域福祉との関係を考察する博士論文研究に基づいて行われた。「お見舞い」とは、災害・病・死などの際、血縁・地縁関係の相互で行われる慣習である。それは、個人の力が及ばない状況下に対応する、生活に根ざした相互扶助である。「お見舞い」のように地域で行われる相互扶助行為には、地域福祉の原型を学ぶことができると考えられる。

上記の問題意識に基づいて今回のプロジェクトでは、特に葬送儀礼に関わる「お見舞い」についての調査を行った。死は人間の有限性を感じる典型的な事例だと考えられるためである。具体的には、①国立歴史民俗博物館『死・葬送・墓制資料集成』、雑誌『旅と伝説 誕生/葬礼特集号』などの資料によるサーヴェ

イ、②地域共同体の協働や相互扶助が根強く残る岐阜県七宗町神淵、愛知県北設楽郡東栄町での聞き取り調査、を行った。

有賀は、香典をはじめ葬送儀礼において行われる贈答行為は、村の一大行事として行われる儀礼のための物質的な援助の側面が強いと指摘した〔有賀 1968〕。また河上は、葬儀における贈答は、「物質的合力」と「見舞い・悔み」の二面性を持つと指摘している〔河上 1964〕。本稿では、調査結果をまとめた上で、葬送儀礼における「お見舞い」が具体的にどのような意義を持つかを考察する。

## 1. 葬送儀礼における「お見舞い」の分布

日本社会において、葬送儀礼の際に香典を贈るのは全国的に見られるしきたりである。香典の多くは金銭

場所	呼び名	見舞う時	見舞い者	内容
青森県野辺地	野見舞い	通夜(埋葬後の夜)	通夜人	埋葬後の新墓に、夜中通夜人が交代で新墓を参る。
東京都南多摩郡 由木村中山	通夜見舞い	通夜	組内、イチマキ (親族)	茶代の名目の下に、金を喪家に贈る。
長野県諏訪	忌中見舞い	五七日(35日目)		天保銭を3枚か5枚、又は線香を3把から5把持って行く。
長野県	日永見舞い	三七日まで		食糧を持って行く。
石川県鹿島郡	火屋見舞い	火をかけて2-3時間後	親戚知人	喪服で火葬場を見舞う。
能登鳳至郡柳田村	精進見舞い	49日目	親戚など	遺族の49日にわたる精進の翌日、餅饅頭などを贈る。
静岡県裾野市	忌中見舞い	葬儀の朝	葬式組・親戚	米五合から一升、茱萸二丁から五丁持ってくる
愛知県起町	淋し見舞い	通夜(臨終の夜)	親戚知人	饅頭菓子等を重箱に入れたものを贈る。
愛知県八開村	トギ見舞い (通夜見舞い)	通夜	親戚	饅頭、もなか、菓子、水羊羹、寿司などを贈る。
	三日見舞い	葬式の翌日	親戚	饅頭、酒、生花、赤飯、白御飯を持ってくる。
岐阜県揖斐郡	忌中見舞い (お淋し見舞い)	七六忌まで 通夜	親戚衆、株衆	寿司、菓子、酒を持ってくる。
京都府亀岡市	忌中見舞い	葬式の翌日	親戚・カブウチ	米三升を重に入れて持参し、お供えする。
香川県高松	忌中見舞い	初七日まで	親戚	黒豆の蒸飯(70以上の死人の場合は赤飯)と重箱の煮しめを贈る。
安芸大崎上島	野辺見舞い	葬儀		葬送に参ることを言う。
愛媛県周桑郡	燈籠見舞い	新盆	親戚・隣近所	素麺を持参し、お参りする。
讃岐仲多渡郡	山見舞い	火葬の夜中	喪家	講中の焼番に対して、喪家から夜中酒食を贈る。
阿蘇宮地町	見舞い	五七日の法事	親類縁家	餅米一升を集め、シイラ糯と餡入り糯をつくり、一部を仏壇に供え、餡入りを組内に5個配る。

図1 「お見舞い」の分布

『旅と伝説』『誕生と葬礼特集号』、『西郊民俗』、『葬送習俗語彙』、『死・葬送・墓制資料集成』より作成

であるが、それと並行して食物の贈答も広く行われている [最上 1964, 有賀 1968 など]。

また葬送儀礼においては、「お見舞い」と呼ばれる行為が広く分布している。葬送儀礼の調査報告書から、全国各地で行われる「お見舞い」をまとめると、以下のようなになる (図 1)。これを見ると、様々な名称の「お見舞い」が行われることがわかる。見舞い者は、親族や組など近い関係の者が中心である。行為内容は、参ることそのものや、金や食物を贈るものなど様々である。

こうした「お見舞い」行為は、どのような意義を持っているのだろうか。次に、岐阜県七宗町神淵地域、愛知県北設楽郡東栄町における聞き取り調査で得られた「お見舞い」の具体を記述する。両地域では、葬送儀礼において「寂し見舞い」を行う慣習がある。

## 2. 神淵地域における事例

### 2-1 神淵地域の概略

神淵が位置するのは、岐阜県中央部である。神淵は、美濃山地の中腹にあたり、全体面積の9割以上が山林である。神淵の集落は、飛騨川の支流である神淵川に沿って作られている。集落を囲む山々の標高は、300から600メートルと比較的低く緩やかである。平均気温は14°C、年間降雨量は2,000ミリ前後である。北部では20センチ程度の雪が積もるが、濃尾平野に比べ風も穏やかである。かつての主要な生業は、林業、稲作、茶、松茸、稲作などであった。

縄文時代の遺跡も多数見つかっており [七宗町 1993 : 98]、神淵の豊かな自然の恵みを受け、古くから人々が住んでいたことが伺える。

現在神淵には、580戸、1,843人<sup>1)</sup>の人が暮らしてい

る。神淵は、4-50戸からなる部落に分かれている。部落内は5-7戸の組に分けられている。5人組の名残とも言われる組は、自治組織の一端であり、最も身近な互助組織として重要視される。古くは味噌作りや豆腐作りなども組内の協働で行われた。また、農繁期に組内で病人が出た時には、組の者が集まって、その家の仕事を肩代わりしたという。組は、日常的な扶助とともに、火急の際に合力し合う組織であった。一部神道の部落もあるが、神淵住民の多くは仏教である。神淵には現在二寺があるが、八割以上は神淵内寺洞部落にある龍門寺の檀家である。

### 2-2 神淵地域における「お見舞い」と葬送儀礼

まず、「お見舞い」が行われる背景である葬送儀礼について見ていこう。現在の神淵地域においては、通夜は自宅で、本葬は龍門寺で行われるのがほとんどである。自宅で葬送儀礼を行うのが困難になった家が増えたことを受けて、龍門寺が葬儀を営む際に利用できる庫裡を建てたことが背景にある。神淵で行われる葬送儀礼の次第は以下の通りである (図 2)。葬送儀礼のうち特に本葬では、組・部落の者が中心的に取持ちを行った。

本葬の際には、参列者が現金で香典を持参する。本葬に参加できない者は、通夜に香典を持参する。神淵では、香典とは別に、通夜において「寂し見舞い」あるいは「伽見舞い」と呼ばれる「お見舞い」が行われる (図 3)。香典は参列者の全てが持参するのに対して、「寂し見舞い」は組・部落の人や親戚など、死者と濃い関係にある人が行う。現在「寂し見舞い」は、①遺族にお悔やみを述べ、寂し見舞いの品を渡す。②遺族らと共に茶を飲みながら故人を偲んで語り合った後、帰途に着く。③遺族は、もらった品を死者の枕元

期日	儀礼	準備・内容
死亡当日の夜	通夜 (伽)	死亡の連絡を受けた組・部落の人が喪家に集まり、葬儀の打合せをする。檀那寺の和尚が喪家を訪れ枕経をあげる。遺族が夜通しで死者につきそう。
通夜の翌日	葬式, 野辺送り	朝から組・部落の人が集まり、受付、齋などの準備をする。かつては野辺送りの葬具などを全て作った。葬儀の次第：読経、引導の偈、焼香、(野辺送り)、齋
7~49日後 (1週間毎) 1, 3, 13, 33年後	法要	遺族、親類、組の人によって行われる。 法要の次第：和尚の読経、焼香、墓参り、組の読経、齋

図 2 神淵地域における葬送儀礼の次第

機会	名称	行うもの	内容
通夜	寂し見舞い (伽見舞い)	組、部落の人 親戚	訪問してお悔やみを述べ、お菓子を渡す。
葬式	香典	参列者	現金を渡す。

図 3 神淵地域における葬送儀礼の贈答

に供える。という次第で行われる。寂し見舞いには、基本的に返礼は行われない。

聞取りによると、戦後間も無いころまでは、ものを持って行くという事は行われていなかったという。それは、寂し見舞いとは、死者に近い人が駆けつけて悔やみを述べるものであったことを意味している。現在「寂し見舞い」として贈られるのは、饅頭などの菓子や果物が基本である。もっとも、最近では現金を包む人も出てきた。

### 3. 東栄町における事例

#### 3-1 東栄町の概略

東栄町が位置するのは、愛知県北東部である。東栄町は、木曾山系の南端にあたる。周囲には1,000メートル級の山々がつらなっており、平坦な耕作地は少ない。平均気温は13℃、年間降雨量は1,800ミリ前後である。かつては、生業として林業が栄えたが、昭和30年以降衰退の一途を辿った。11月には天竜川流域に分布する霜月神楽の一形態である花祭りが行われる。近年では花祭りの観光化が進められている。

今回聞取りを行ったのは、東栄町の大字振草字小林の集落である。現在28戸、およそ60人が暮らしている。最盛期には70戸あった。集落は、上下組、日影組、下村組、輸出組、林組、上組、中田組の七組に分けられている。山の神、庚申など各種の講が行われていたが、過疎・高齢化に伴い現在は行われなくなっている。特に2ヶ月に一度行われる庚申講は、情報交換の場としても頼母子の機能としても、生活の中で重要な役割を持っていた。集落内には本家・分家関係が多く見られる。また実際の血縁関係がなくとも、つきあいの濃い関係の家を「シンセキ」と呼び、血縁者

同様のつきあいをした。

小林集落は、神道の家が数軒ある以外は、全戸が仏教である。かつては小林の中に東光寺という寺があったが、現在は無住となっている。そのため、隣りの集落である上栗代にある歓喜寺を檀那寺としている家が多い。

#### 3-2 東栄町における「お見舞い」と葬送儀礼

葬送儀礼を家で行う場合は、近隣住民の協力が不可欠である。しかし、小林地区では、過疎・高齢化により、自宅での葬儀が困難になってきている。そのため現在は、葬送儀礼を農協の斎場で行う人が増えている。ただ、「斎場ではしきたり通りの葬式ができない」こともあり、自宅で見送ってあげたいという考えが根強い。自宅で葬送儀礼を行う際中心となって働くのは、庚申講を行う際の単位組織である。その単位組織は弇い組とも呼ばれる。葬送儀礼の次第は以下の通りである(図4)。

小林では、通夜の時には「寂し見舞い」、本葬では香典、そして忌明けには「ご仏前」という形で段階ごとにものが贈られる(図5)。そのうち、「寂し見舞い」「忌明けのご仏前」は、組、親戚などの特に死者に近い者が行う。

現在「寂し見舞い」は、お菓子と共に2,000円程度の現金を包むのが普通とされている。もっともかつては、「寂し見舞い」とは、ものの贈与を伴うものではなかった。死亡の知らせを受けた近所の人が誘い合って、喪家を訪れることが「寂し見舞い」であった。故人の顔を見て、遺族に悔やみを述べる行為が中心であった。「寂し見舞い」とは、知らせを受けた近隣の人々が、とっさに喪家にかけてける行為であることを表している。

期日	儀礼	準備・内容
死亡当日の夜	通夜(伽)	飛脚と呼ばれる役の者が、二人一組で区内に死亡を知らせて回る。死亡の連絡を受けた区の者が、悔やみに訪れる。弇い組の者が集まり、葬儀の打合せをする。遺族が夜通しで死者につきそう。
死亡の翌日	葬礼準備	葬礼道具を作る準備をする。土葬だった頃は、穴掘りをした。
死亡の翌々日	本葬、寺参り、組念仏	本葬の次第：読経、引導の偈、焼香。その後野辺送りの行列、寺参り、組念仏を行う。
7~49日	法要	七日ごとに七枚塔婆を1枚ずつ墓へ供える。

図4 東栄町における葬送儀礼の次第

機会	名称	行うもの	内容
通夜	寂し見舞い	親戚、組	お菓子と2000円程度の現金を渡す
葬式	香典	参列者	現金を渡す
忌明け	忌明けのご仏前	親戚、後見人	現金をわたす

図5 東栄町における葬送儀礼の贈答

#### 4. 「お見舞い」と葬送儀礼

東栄町と神淵の聞き取りを行う中で、「香典は頼母子のようなものだ」という言葉が聞かれた。これは香典が、皆がお金を出し合うことで、金を必要とする者を支えていく仕組みであることを表している。

有賀は「葬式ばかりは多くは突然に生じ、しかも入費を予定することが出来ず、必要なだけは費消せねばならないので、どんな家でも急にそれにまに合わせることは困難であった（中略）仲間の協力が急激に要求せられる」[有賀 1968：244]と述べている。そのように、香典は葬儀を行うために必要な金額を出し合う、物質的な援助の側面が強いと考えられる。香典が現金で行われることも、それを意味していると言えよう。

それに対して「寂し見舞い」は、双方の調査地で「かつてはなにも持たずに喪家を訪れるものであった」と言われるように、物質的援助とは異なる側面を持っている。では、「寂し見舞い」にはどのような意義があるのだろうか。ここでは、葬送儀礼と人々の役割を踏まえながら考察してみたい。

井之口は、葬式を「死者の霊肉処理にとまなう儀礼」としている[井之口 1979：39]。肉体に対する処理は、埋葬の時点で終わるが、その後の弔い上げにいたるまでの期間、霊魂に対する供養を重ねることで、霊魂が祖霊として浮かべられることが可能になる、とする。具体的には、「死の前後における儀礼、死の直後の儀礼、入棺通夜の儀礼、野辺送り、（中略）霊魂がしだいに清まってくるにとまなう儀礼」[井之口 1977：88]の全体を言う（図6）。特に葬送儀礼において最も長いのは供養の期間であり、それだけ重要度が高いものと考えられる。

新谷は、死者に対する忌みとの関係によって、葬送儀礼に関る人々を血縁的立場（忌みが強い）、地縁的立場（忌みが弱い）、無縁的立場（忌みを超越）に分類している[新谷 1995：184]。神淵および東栄町の

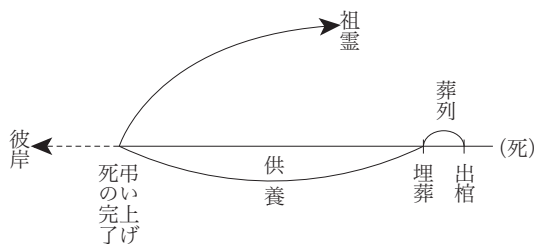


図6 葬送儀礼の範囲  
『日本の葬式』より

立場	役割
家族	供養の中心
僧侶	儀礼遂行、仏への引導
組、部落の人	葬送儀礼に必要な合力、および供養の補助

図7 葬送儀礼における人々の役割

事例においてもこの分類方法は相当する（図7）。死者供養の中心となるのは、仏壇及び墓の世話を行っていく遺族である。葬送儀礼で重要なのは、最も期間が長い供養であった。それを中心的に行っていく遺族は、主体的に葬送儀礼を行う中心的存在である。

しかし、葬式を行う際に中心的に働くのは、組（弔い組）・部落の人々であった。組・部落の人は法要にも招かれる。喪家と近い地縁関係にある者は、葬式からその後の供養まで、遺族を支え葬送儀礼を補助する重要な位置にあることが分かる。

「寂し見舞い」は、葬送儀礼を支える近隣の人々が、「知らせを聞いてかけつけ、故人と対面した上で、遺族にお悔やみを言う」行為である。そうして集まった人々によって、葬儀儀礼の取持ちが行われる。死の直後は、家族の一人を失うことで、家内の日常生活の平衡が崩れた状態である。そこに近隣の人がかけつけることで、遺族は葬送儀礼へと促される。こうした形で、近隣の人々は葬送儀礼を支えるのである。

このように「寂し見舞い」とは、死者への別れを述べる行為であるとともに、遺族を葬送儀礼に向けて支え促す行為であると考えられる。死者の供養を行っていく遺族を支え促す「寂し見舞い」は、近隣住民による死者への間接的な供養であると考えられる。

#### おわりに

神淵および東栄町における聞き取り調査から、以下のことが明らかになった。「寂し見舞い」とは、葬送儀礼を支えていく立場にある近隣の組・部落の者によって行われる。それは集落の一員である死者への別れを述べる行為である。同時に、死によって平衡が崩れた状態にある遺族を支え、供養へと促す行為である。こうした形で、近隣住民は供養を支え、間接的に供養を行う。

家族の一員を亡くし平衡を失った遺族は、供養の担い手となり死者を仏と位置づけていくことで、家の平衡を取り戻す。家が秩序を維持することによって、共同体の安定は保たれ、人々の日々の生活の安寧は保たれる。このように、地域共同体における「寂し見舞



い」の慣習は、一人の人間の死を共同体全体でカバーしていく仕組みの一端を表していると考えられる。

#### 注

1) 平成18年の神淵神社氏子総代会「金幣社神淵神社改革改善案資料」による。

#### 参考文献

有賀喜左衛門 1968 「不幸音信帳から見た村の生活—信州伊那郡朝日村を中心として—」『有賀喜左衛門著作集5』未来社  
石森秀三 1984 「死と贈答—見舞受納帳による社会関係の分析—」伊藤幹治ほか編『日本人の贈答』ミネルヴァ書房  
井之口章次 1977 『日本の葬式』筑摩書房  
井之口章次 1979 「葬式概念」井之口章次編『葬送墓制研究集成二』名著出版  
河上一雄 1964 「贈答の社会的性格—とくに葬儀をめぐって—」『西郊民俗』29・30合併号 西郊民俗談話会

国立歴史民俗博物館 2000 『国立歴史民俗博物館資料調査報告書 死・葬送・墓制資料集成』国立歴史民俗博物館  
新谷尚紀 1995 『死と人生の民俗学』曜曜社  
七宗町教育委員会 1993 『七宗町史』七宗町  
七宗町神淵神社氏子総代会 2006 「金幣社神淵神社改革改善案資料」  
西村克彦訳 1982-83 「テンニエス著『しきたり』(Die Sitte)」青山法学論集24巻3号-4号  
萩原正徳編 1933 『旅と伝説』「誕生 葬礼特集号」三元社  
橋本鉄男 1964 「振舞と見舞と—贈答と共同飲食—」『西郊民俗』29・30合併号 西郊民俗談話会  
藤井正男 1993 「祖先祭祀の儀礼構造と民俗」弘文堂  
最上孝敬 1964 「葬礼と贈答」『西郊民俗』29・30合併号 西郊民俗談話会  
柳田国男 1975 『葬送習俗語彙集』国書刊行会  
東栄町誌編集委員会 2007 『東栄町誌 自然・民俗・通史』北設楽郡東栄町